

桂雀太／咲くやこの花インタビューvol.14

桂雀太(かつら・じゃくた)【平成 29 年度 大衆芸能部門[落語】】



2017 年春、入門 15 年目、40 歳の節目に事務所から独立した落語家の桂雀太さん。180 cmを超える長身にジャケットをスマートに着こなす姿は、一見するとクリエイティブなビジネスマンのよう。その実 2016 年、「なにわ芸術祭 新人奨励賞」、「NHK 新人落語大賞」を受賞。翌年、独立後初となるタイトル「咲くやこの花賞」に輝くなど、実力は折り紙つき。まさに機が熟しての“落語家・第 2 章”の幕開けです。

奈良県五條市出身。2017 年より同市観光大使に就任。関西大学では法学部に学び、卒業後は「公務員として働くつもりだった」。しかし、縁あって 2002 年 5 月、桂雀三郎に入門。2カ月後には大阪トリイホール「雀三郎みなみ亭」で初舞台、「子ほめ」を初披露した。現在、古典落語を中心に滑稽噺の「代書」「遊山船」「替り目」、人情噺の「ねずみ」「夢の革財布」など幅広いネタを携え、天満天神繁昌亭、動楽亭、カフェ、ライブハウスなど様々な場所で口演。ネットラジオ番組「ネットでじゃくつたれ」を定期的に無料配信するほか、毎年恒例の千日前トリイホール「桂雀太ひとり会」、天満天神繁昌亭「桂雀太独演会」はすべて満員御礼の盛況ぶりです。独立から約 1 年を経たこの日、改めて落語への思いを聞くと、春風のように心地よい答えが返ってきました。

「今はひとり1メディア時代、独立は自然な流れでした」

この度、29年度「咲くやこの花賞」を受賞されました。

嬉しかったですね。昨年、一年上の先輩、桂佐ん吉さんが受賞されていたこともあり、賞の存在は知っていました。上方で活躍していくうえで、これ以上ない賞ですよ。でも受賞の知らせって、本当に突然なんですね。喫茶店にいたのですが、電話を受けた時は半信半疑でした。その後、電話を切ってから「ホンマなんや…」とじわじわ実感が湧いてきました。

2018年2月、大阪国際交流センターで開催された贈呈式では、軽妙なトークで会場を沸かせました。



例えば、パイプオルガンで受賞された方は楽器を会場まで持って来られませんか、写真家の方がその場でパフォーマンスするというのも難しい。その点僕らは身軽ですから、空間さえあればどこでも落語ができる。他の受賞者の方々が映像で活動を紹介されていく中、僕だけ当日に「この時間内でお願いします」と、即興で口演させられました(笑)。ありがたいことです。

(笑)。大阪文化にちなんだ賞ですが、普段から関西出身ということは意識されますか。

意識するとすれば、関西以外の場所に出向いた時でしょうね。上方代表として、いつもより大きめに声を張るとかね……いや、冗談ですよ(笑)。声は普通ですが、「この言葉で通じてるかな？」というのは意識し

ます。例えば、「でんぼ」は関西でも地域によって微妙に意味が違って来る。大阪では「吹き出物」「できもの」ですが、京都では「たんこぶ」の意味なんです。「愛宕山」という演目では、山登りの最中に「尻つき」といって、後ろの人が前の人のお尻を押す場面が出てくる。その時、前の人が「右はアカンで、でんぼできてるから」と言うんですが、これを京都の人が聞いたら「お尻にたんこぶ！？」となるわけです。とくに年配の方ほど疑問に思われる方が多いという話は、よく耳にしますね。他にも、大阪でいう酒の「アテ」は、関東では「肴」「つまみ」と言ったり。お客さんの反応を見ながら、通じてないなと思ったら、「アテ持って来て。肴、つまみ」とか言い足したりしてね。その場で変えていくのもライブならではの醍醐味です。

独立に関しては、前年に NHK 新人落語大賞を受賞したことで、ご自身の中でも「基礎が固まった」という意識があったそうですね。自力がつき時代の流れもありと、色々なことが重なったタイミングでもあったのか。

禪の言葉に啐啄同時という言葉があるんです。鶏の雛が卵から生まれ出ようとするとき、殻の中から卵の殻をつついて音をたてる。これを「啐」と言う。すかさず親鳥が外から殻をついばんで破ることを「啄」と言う。この「啐」と「啄」が同時であって始めて、殻が破れて雛が産まれるわけです。それにふさわしい「とき」があるということ。そういう感覚ですね。また近頃は、身軽でいたいという気持ちにもなってきました。昔は服とか時計とか好きなものをコレクションしたり、ものに執着心があった。それがだんだんと、物質的なものを手に入れることが幸せだと思えなくなってきた。うちの師匠がそういう人なんです。いつでも引っ越しできるようにと、若い頃からものを持たない、すぐ捨てる。差し入れなんかも「ありがとうございます」と頂いたそばから、気持ちだけを受け取って、弟子に「はい、あげる」ですから。僕らはたいへんありがたいです(笑)。あとは、時代の流れでしょうね。最近ではキョンキョン(小泉今日子)、北野武さんなど、続々と独立されていますよね。多分、僕を真似してのことなのでしょうけど(笑)。いや冗談抜きに、これからはホンマに個人の時代になると思いますよ。

個人の時代ですか。

メディアにしても、まず最初に新聞が出て来てナンバーワンの時代があった。次にラジオ、その次にテレビの時代が 60 年ぐらい続いて、1995 年に「Windows95」が発売されるとインターネットが家庭の中にまで広まった。今では完全に浸透して 1 人 1 台スマートフォンを持っている時代。しかも、SNS の登場で「ひとり 1 メディア時代」ですから。対個人でやり取りができる。これまではマスメディアという大きな媒体があって、そこに芸能プロダクション、大きな広告会社が密な関係を築くという構図がありましたが、それが成り立たなくなっている。マスの力が自然と弱くなる中で、どこかに所属するという必要性が感じられなくなってきたというのが実感です。テレビがいつまでも、王者でいられる時代でもないですからね。やがてインターネットも古いと言われる時代が来ることでしょう。世の中諸行無常ですね。



現代はネットでテレビ番組を見る世代も多いそうですね。

40、50 代の僕らがテレビネイティブ世代だとしたら、今の 20 代以前の人たちは、産まれた時からインターネットの環境があった「ネットネイティブ世代」。そんな若い人たちがいま大学を卒業して、ぼちぼち社会に出始めている。そうすると、感覚が全然違うんですよ。まずテレビを見ない。いまのテレビは見ていると、いかに 10、20 代向けの番組が少ないかに気づくと思います。歌番組も 40、50 代に向けた、懐かしの曲ばかりなんですよ。僕らがとりあえずテレビがついてないと落ち着かないように、ネットネイティブ世代は携帯が手放せない。パーソナルメディアの普及とともに、僕に限らず独立という選択は今後増えていくと思います。

「初落語は『何これー!?』と、今までにない非日常感でした」

そもそも落語家になるきっかけは？

僕はまさにインターネットが浸透し始めた 95 年に関西大学に入学しました。学内では落研（落語研究会）が盛んだったのですが、当時は食わず嫌いでしたね。落研の一回生と三回生が寒空の下、浴衣姿でグラウンドの端と端に立って「声出せー！」とかやってるのを横目に、「今どきやないでー」と思っていました（笑）。

落語との出会いは。



今思えば、何となく落語に興味がないわけでもなかったと思います。その頃、本が好きで中島らもさんの本をよく読んでいたんですが、彼が好きということで、本にもちよくちよく落語家さんの名前が出てくるわけです。だんだんとインプットされますやん(笑)。そこから、日常でも落語に関するものが目に入ってくるようになってきて。ある日、映画でも観に行こかと情報誌をめくっていたら、たまたま演芸ページにある「落語」の文字が目についた。「え、落語って観れるの?」と。そこから調べたら、わりと家の近所で、しかも今日やってるでと。「桂雀三郎って誰やろう?」と思いながら、映画行くのやめて落語を見に行っていました。

いきなり後に師匠となる、桂雀三郎さんとの出会いが待っていたのですね。

それが師匠の 50 歳を記念した、25 日連続の落語会でした。1 日 2 席で 50 席。見に行ったのが企画がスタートして 10 日目前後の日でした。会場は一心寺シアター。でも、メインホールではなく「立身出世劇場」という、劇団の稽古場だったんですよ。30 人も入れば一杯になるような狭い場所で、「こんなところでやんの!?!」と。到着したらすでにお客さんが結構入ってて、ここしか空いてませんと通されたのが一番前の席だった。舞台から「近っ!」と思っていたら、(開演 5 分前を示す)二番太鼓が予告もなしに「どどーん!」と鳴り出すから何事かとビックリしてね(笑)。その後、三味線が鳴り出して、着物を来た人が出て来た。それが初めて生で見た落語家、桂あさ吉さんでした。



その後、いよいよ真打ち桂雀三郎師匠の登場です。

「さっきの人より喋るな～」と思って見てたら突然噺が終わったというのが第一印象でした。面白いも何も、相手は目と鼻の先の至近距離で全力で話してるわけですから、内容を理解する以前に、ただただ圧倒されて「すごい、何これ!？」と、今までに味わったことのないような非日常感でした。こういう空間は面白いし、また行きたいと思って調べたら、どうやら 25 日連続の落語会で「明日もやってるわ!」と。そこから残り 15 日間のうち 3 分の 1 は見に行っていました。

初回でいきなりハマったのですね。雀太さんが大学四回生のころのお話です。当時は公務員を目標に、就職活動の真っ只中だったとか。

僕らの時代は就職氷河期で民間の就職先も少なく、消去法で「公務員が一番らしいで」と友達との間でもそういう空気だった。その後、公務員の試験にはことごとく落ちるんですけど…。現実にはなかなか落語家になるための一歩を踏み出せずにいました。もともと、お笑いが好きなダウンタウン世代ですし、一度はお笑い芸人になりたいと思った時期もあったので。一応“公務員浪人”を名乗りつつも悶々とした日々を過ごすうちに、消去法で決めてしまうなんて、「なんや俺の人生!」という思いもあり、ようやく一歩を踏み出すことにしました。

実際、どんな行動に出たのですか？



いろいろと調べるうちにどうやら誰かの弟子にならなくてははいけないらしいぞと。出会いのインパクトから「桂雀三郎師匠しかない」と決めて、毎月恒例の落語会「雀三郎みなみ亭」で出待ちをしました。トリイホールの楽屋口で待っていたら、師匠が15人ぐらい、結構な人数のお供を連れて出てきたんですよ。「こんなにおるの!？」と思っているうちに、打ち上げ会場の「ニューミュンヘン」に入って行かれ…。

トントン拍子にとは、いかなかった。

「ニューミュンヘン」の次は5、6人で法善寺横町へと二次会に行かれ、そこでも声を掛けそびれてしまった。そうや、お酒を飲まれているからと、ペットボトルの水を5本ほど用意して店の前で立って待っていました。午前1時半を過ぎた頃ようやく師匠たちが店から出て来られた。すると、入口付近でお連れの女性がコケはったんですよ。そこで、「すいません、こんな時に何なんですが…」と、師匠に向かって話を切り出しました。

えっ、女性を助けずにですか。

なぜか「いまや！」と思ったんでしょうね(笑)。「弟子にしてください」と伝えたら、師匠が「新しい弟子をとったところやねん。二人いっぺんにはとても無理やから、今すぐやったら、ほかあたって」とキツパリ断られまして、一応粘ったんですがやっぱりダメでした。僕としては他の師匠は考えられへんし、告白できたことに満足していた部分もあり、その後はまた公務員浪人に戻るのですが…。でも「やっぱり諦められへん！」と思い立ち、以前に修行生活は2年ぐらいだと聞いていたので、一年半後ぐらいにまた師匠のもとを訪ねたんです。今度は自宅に直談判にいきました。

法善寺横町での一件は話されましたか？

「君かいなー」と言われました。師匠に「真夜中にあんな薄暗いところからお前みたいなデカイもんに出て来られたら、ビックリするわ。見知らぬやつからもらた水なんか、誰が飲むかい」と言われ、そりゃそうやなと(笑)。後日、『ワッハ上方』に出演するから楽屋まで来なさいと仰っていただきました。僕に落語の経験がないと知ると、「ほな一本教えたるわ」とそこから1ヶ月ぐらいかけて師匠に「子ほめ」という噺を教えてもらい、「ほな、とるわ」と弟子入りが決まりました。

「年齢を重ねるほどに、師匠への尊敬の念が高まっています」

落語家として「今日はようできたな」と思う瞬間は？

入門からまる16年経ちますけど、前半5年、半ば5年、そのあと5年で区切っても「ようできたな」と思うポイントが全然違いますね。傾向でいうと“独りよがりさ”がだんだんと減ってきた。最初のころは聞いている人

も肩凝ってたと思いますよ。ただただ大きな声でどなってたんで。師匠からは、それでええと言われました。やかましいと言われるぐらいでちょうど良いから、もっと声出して行けと。



出し惜しみはするなと。

そこは師匠にも感謝するところですね。最初からおさまっていると、後から大きな声なんて出せないんですよ。初めはやかましいぐらいに全部全力でいけば、最後は絶対に自分で疲れてくるし、ウケへんことも、力の抜き具合も分かってくるからと。その点、最初から僕の嘸を聞いてくれる人にはよう言われます、ホンマにうるさ過ぎて「嫌いやったもん！」って(笑)。

(笑)。ひとりの落語家を、聞き続けることの面白さもありそうです。

そうですね。今は、昔ほどには力まずにできてます。ネタが体に浸透してきて、冷静な部分が増えてきた。極端なことを言えば、他のことを考えながらでもいけるくらい。最初のころは覚えた事をアウトプットしているだけでしたから。そういう意味でも、師匠はすごいなと思いますね。すごく先のことを見越した上での今の指導だったんだなと。こういうことかと、後々気づくことも多いです。

ドラマチックなエピソードです。

年齢を重ねるごとに、師匠への尊敬の度合いが高まっていますね。最初の頃は、すごくベーシックな落語のテクニックについて飽きもせず冷静に、根気よく指導してもらいました。「こうですか」「ちやうねん、こうやねん。やったらできるから」というやり取りを永遠と繰り返し、7年が過ぎたころに少し自分でも手応えがあったんですね。「これですか」と聞くと、「それやがな」と。もう、僕からしたら「天下獲った！」ぐらいの気持ち

ですよね。そしたら師匠が「いやいや、ちゃうで。まだあるよ」と。よく見たら次の壁がずら一つと続いていた。「ウソや〜ん」って(笑)。



(笑)。教えと経験を糧にこれからの活躍にも期待が高まります。最後に、落語家は天職ですか。

いい仕事というか、いい生き方に出合ったなと思いますね。はじまりを思えばご縁としか言いようがないんですけど。奈良の地元に帰ったら未だに言われることもありますよ、「あの、アイツが落語家！？」って。自分でも意外です(笑)。目標というより、一番は自分が穏やかな気持ちで舞台に上がることに。独立を決めた去年の今ごろはスーパーストレス時代だったので(笑)。イライラしながら舞台に出てもしんどいだけですし、お客さんにもバレますから。日常を穏やかに過ごしていれば、おのずとネタにもいい味が出てくると思います。それが、生涯の課題やと思うんですね。活動に関しては、演芸会とかもやってみたい。例えば、漫才、浪曲、マジック、講談などと一緒に2時間なりを構成すれば、色変わりして退屈もしないでしょうし、幅広い人に落語の良さも見てもらえる。いいですよね。これからも、個人の責任とフットワークの良さを活かした活動をしていきたいなと思います。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

水都大阪にちなみ『落語家と行く なにわ探検クルーズ』です。落語家が水先案内人となり毎日出航しています。僕も定期的に搭乗しています。道頓堀を出発して木津川、堂島川…と90分かけて近隣を一周します。一回の搭乗は40人ぐらい。川から観る大阪の景色も良いですよ。中之島とか、桜のシーズンは桜ノ宮を回る30分延長した2時間の「桜スペシャルクルーズ」も始まります。出航時間は10時、12時、14時の3回。10時の便はUSJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)から出航するので海外からの観光客にも人気です。USJで遊んで一泊したら翌朝は船で大阪市内を観光して、11時半に道頓堀で降りるというコース。グリコの看板前も通りますし、道頓堀でランチもできる。最高でしょ(笑)。

『落語家と行く なにわ探検クルーズ』 <http://www.ipponmatsu.co.jp/cruise/naniwa.html>

